

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

連合本部 連帯活動局 石田 輝 正

出発前は「長いな～」と思われたツアーではありましたが、内容が濃く、行く先々の訪問先で大きな感動と感激があったことから、全行程を終えてバンコクから羽田空港に向かう飛行機の中では「アッという間だったな～」と寂しさを感じました。

今回のツアーに参加することになった背景は、2017年秋の人事異動で連帯活動局に配属となったことで、山岡事務局長からCSAの活動に関する説明を受け、直接ツアー参加のお誘いがあったことと、上司からの強い要請があったからです。しかし、CSAについては、説明を受けた範囲内のことしかわからず、言葉の問題とあわせて、個人的にはパクチーをはじめとする香草類が大の苦手という事情もあり、不安材料を打ち消すことができずに出発の日を迎えたというのが事実でした。



卒寮生との記念写真

そのような状況の中でのツアー参加ではありましたが、連合「愛のカンパ」の助成団体であるCSAの活動と、これまでの取り組みを現地で学ぶとともに、支援先のみなさんの喜ぶ声を直接聞くことができたのは、とても有意義で贅沢なツアーであったと認識しています。

タイ社会開発福祉省で行われた救援衣類引渡し式では、想像を超える盛大な式が準備されており、CSAの活動がタイ政府をはじめとする多くのみなさまに評価されていることを実感すると同時に、連合「愛のカンパ」が有効に活用されていることとあわせて、長きに渡る諸先輩方、諸団体のみなさまの活動によってこのような場に立ち会わせていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。

また、CSAが支援している遠隔地高校生支援事業「サンティパー高校生寮」の卒寮生や、高校生寮の生徒たちとの交流会では、代表者が述べた「私たちの今があるのはCSAの支援のお陰です」という言葉を、卒寮生や生徒たち一人ひとりが言葉の壁があるものの、私たちに一生懸命伝えようとする姿には言葉では表すことができない感動と感激がありました。高校生寮の生徒や卒寮生のみなさんの純粋な笑顔、別れ際に見えなくなるまで手を振る姿は、決して忘れることはできません。

あわせて、ファサン村小学校、ナカン村小学校、ホアナ村小学校での生徒や教員、村人のみなさんの歓迎も心に残りました。言葉は通じなくとも、一緒に紙飛行機を作り、グラウンドで飛ばし、綱引きなどを楽しんだ時間は忘れることはないでしょう。

今回のツアーを通じて、連合の取り組みとあわせて、CSAの活動がラオス・タイのみなさんに大いに役に立っていること、感謝されていることを強く実感することができました。その中には、連合「愛のカンパ」の助成団体である「難民を助ける会」ビエンチャン事務所の取り組みも同様で、車いす製造から障がい者の収入向上や学校給食支援へと拡大していること等、「愛のカンパ」が海外で役立っていることも確認することができ、とても有難く、ラオス・タイのみなさんの温かさにあわせて、すべての出会いが私の大切な宝物となりました。

最後に、ハードスケジュールでありながら、突然の歓迎会が用意される等、山岡事務局長、鈴木事務局次長には大変なご苦勞があったかと思いますが、お二人の臨機応変な判断と、参加メンバーのみなさんのお陰で無事に全行程を終えることができました。

個人的には、出発前の不安材料であったパクチーをはじめとする香草類を克服することはできませんでしたが、そのことも含めて貴重な経験となりました。

CSA事務局のみなさんをはじめ、私たちを快く受け入れていただいた現地のみなさんに心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン カネボウ労働組合 高林 希和



ファサン村の小学生と

「サバイ・ディー」このラオス語の挨拶を滞在中に何度交わしたことでしょう。

手を合わせてサバイディーと声をかけるだけで、小学生から省庁にお勤めの方、ドライバーまで、すべての方が嬉しそうな顔で、時には恥ずかしそうにしつつも、心温まる笑顔で挨拶をしてくれました。

お互いを知るために、また親しくなるためには、勇気を持って、まずこちらから声をかけるという原点を思い起こされたツアーでもありました。

弊労組から2007年にこのツアーに参加した人が、既に取り組みを行っている中古衣類のカンパ活動の継続と併せて、学校が足りていない現状と学校建設の必要性を報告しました。

それを契機に、組合員一丸となって「ラオスに小学校を建てよう！」というカンパ活動を行い、2011年にパチャオ村小学校（23番目校）を寄贈することが出来ました。

そのこともあり、今回のツアーで小学校を訪問出来ることが本当に楽しみでした。学校を訪れたら感動するだろうなとは思っていましたが、その予想を大幅に上回る、なんとも言えない感情が湧きあがり、涙を堪えるのに必死でした。子どもたちのキラキラした瞳、無邪気に駆け回る姿、先生方の温かなまなざし、感謝の気持ちが心からだと伝わる歓迎やおもてなし。

高校生寮では、私たちが到着する前から整列して拍手で迎えてくださるなど、国賓か芸能人にもなったようで、恥ずかしくもあり、申し訳ないような気持ちにもなりました。

旅の無事や今年一年が良い年であることを、村の長老を始め、先生や村人、高校生寮では高校生までもがバーシーセレモニーという儀式をしてくれたことにも心を打たれました。他者を思いやる気持ちが小さい頃から培われている国民性が伝わります。

また、そこまで歓迎してくれたのは、CSAの活動がいかに感謝され必要とされているかということのを再認識する機会でもありました。弊労組では中古衣類の取り組みについては力を入れておりましたが、今後は学校支援活動についても伝えていく必要があると感じました。

中古衣類については、ラオスに海が無いためにタイから陸送するしかなく輸送費が高くなると

いうことを聞き、輸送費カンパの必要性を再確認しました。また、暑いイメージだったラオスやタイの北部や冬は寒いので防寒着が必要ということ、ルアンプラバンにおいて、托鉢の見学のためにAM5:30に外に出たら気温が15℃と非常に寒かったので、身を持って体験することも出来ました。

高校生寮での衣類引き渡し式典では、用意されていたダンボール箱が弊労組のものであり、その偶然に鳥肌が立ちました。そのおかげで、私がプレゼンターという大役を担わせていただき、弊労組への報告に花を添えることが出来たのかなと思います。

タイの衣類倉庫でも弊労組からの送り状を、大量に積まれたダンボールの中から見つけることができました。こちらでも偶然の引きあわせとも思いますが、毎年9000点を超す衣類を送ってきた活動が実を結んだとも思いますので、今回のツアーへの参加を機に、引き続きの積極的な活動を行っていく使命を感じました。

貧富の差があり、まだまだCSAの支援を必要とするラオスではありますが、色々な人との出会いを経て、自国の日本についても考えさせられました。物質的に豊かなことは間違いありません。ですが、幸福感を感じられない人が多くいるのも現実です。ラオスの子どもたちも可愛いけれど、やっぱり日本の子どもたちも可愛いです。彼らにも幸せいっぱいの笑顔でいて欲しいですし、夢を持って欲しいと思います。そんな子どもたちを生み育てる大人や社会について、自分には何が出来るのでしょうか。まずは自分の職場の組合員が心豊かで幸せを感じられるような活動を、私が出来ることから行いたいと思います。

最後に、今回のツアーで一緒させていただきましたCSAの山岡さんに鈴木さん、団長、副団長をはじめとする参加者の皆様、お世話になりました本当にありがとうございました。色々なお話をお伺いし、教えていただきまして、勉強になり、そしてとても楽しい8日間でした。

コブチャイライライ！

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン トーカイ労働組合 米田 隆

サバーイ・ディー！！2018WS T本当に貴重な経験が出来ました。

単組としては社会貢献活動の一環として2009年から中古衣料の支援活動に取り組み始め、現在も継続して活動に取り組んでいます。単組役員として活動の推進役である事から、取組み時期になると告知はもちろん、事務所に送られてくる中古衣料の状態を確認して、仕分け、梱包等の作業も行うなど積極的に関わっていた事もあり、毎年配布されているCSAワーキング・スタディ・ツアーの報告書は必ず目を通していました。又、過去に実際参加した友好労組の役員からもこのツアーの事を聞いていたので、個人的にも参加したい思いを持っていたタイミングで産別から単組に



ナカン村小学校での代表挨拶

派遣依頼がありましたので、勝手に？都合よく？派遣を引き寄せた！と感じています。（笑笑）

実際に参加してWS Tを振り返ると、やはり一番感じるのは、過去に参加した方の報告書からだけでは伝わり切らない経験が出来た事です。言葉は通じないのですが、現地の方から受ける暖かい歓迎や心からの笑顔で、今までCSAが取り組んで来た活動が表面的では無い事は私だけでなくチーム全員が感じたと思います。このCSAの活動は中古衣料を送るだけ、校舎・寮を寄贈するだけの活動ではありません。支援国の未来を支えていく子供たちの人材育成・教育支援に深く関わっていて、子供たちの将来にも大きく影響している活動である事実を、多くの関係者に伝える必要があると感じました。

今回のWS Tでの私の役割として、ナカン村小学校に訪問した際に、子供たちの前でチームを代表しての挨拶及び、中古衣類の贈呈役がありました。挨拶では初めて覚えたラオ語を使いながら、ぎこちない挨拶ではありましたが、子供たちに日本語の挨拶を教えると、「コ・ン・ニ・チ・ワ！」と校庭中に響く程の大きな声でみんなが笑顔で挨拶してくれた時は、鳥肌が立つほど嬉しかったのを覚えています。

一方、訪問先ではいくつかの場面で自分の感覚で判断していた事を改めて気付かされました。それは出発前に事務局からの要請があって、現地の小学生にプレゼント用の兜を新聞紙で折っている時に、「こんな物で本当に子供たちは喜ぶのだろうか？」と半信半疑な思いで依頼のあった枚数だけを準備した事です。小学校を訪問した際に新聞紙の兜を頭に被せてプレゼントするのですが、実際にあれほど喜んでくれるなんて思っておらず、チームで準備した枚数では数が足りないため、兜を貰えず残念そうな表情をする子供を見ていて、もっと沢山作って来てあげれば良かったと申し訳ない思いで仕方ありませんでした。又、衣類の保管倉庫を訪問した際にも、山岳部などではジャンパー類や毛布がもっと必要である事実も、年中を通して温かい国のイメージで需要はあまり無いだろうと勝手に判断していた事は、今後の活動を進める際に注意したいと思います。

個人としては、自分や家族が要らなくなった中古衣料を寄付する小さな取り組みしかしていなかったけれど、仲間が集まり支援の輪を広げる事でCSAの活動の可能性は無限です。私も地方連合会や産別の仲間が集まる場で、支援を広げる働きかけをしたいと思います。是非皆さんもCSAの活動を積極的に支援して参りましょう。

最後に、WS Tを通じて得た現地の情報は、この報告書等で活動を支える組合の仲間に伝え教える事は出来ますが、今回のチームで共有した時間と経験は伝え教える事は決して出来ません。チームの皆さん有難うございました。

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UAゼンセン 万代ユニオン 松末祥司

先ず初めに、今回2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加し、貴重な体験をさせて頂いた事を山岡事務局長・鈴木事務局次長、UAゼンセンに心から感謝申し上げます。

また、メンバーをまとめて下さった石田団長・椎野副団長、本当にありがとうございました。私自身は組合の専従をさせて頂くようになってから日が浅く、単組で中古衣類を集め送っていることは知っていましたが、CSAの支援活動を殆んど理解していませんでした。そんな私がUAゼ

ンセン流通部門を代表して参加させて頂いても良いのか？と、本当に悩んでおりましたが、せっかくお話を頂き、個人では到底できない体験が出来る、今後の取り組みに繋げることが出来る、何より私自身の成長になると思い、不安でいっぱいながらも参加させて頂きました。

今回特に印象に残っていることは、ファサン村小学校・ナカン村小学校・ホアナ村小学校の全ての子どもたちのキラキラした目と無邪気な笑顔です。新聞紙で作った兜を恥ずかしいながらも被せて欲しそうに寄ってくる子どもや自分たちで折った紙飛行機を校庭で飛ばして喜んでいる子どもを見て本当に癒されました。

しかし、綱引きになると履いているサンダルを脱いで素足になる子どもをたくさん見た時に、衣類だけでなく靴やサンダルの支援も必要ではないかと今後の課題のようなものを個人的に感じました。また今回訪問した全ての小学校での歓迎ぶりに驚いたと同時に、本当にCSAが行っている支援活動を感謝しているし、今後も継続して支援を必要としていることが実感できました。これは現地では分からない事だったので参加させて頂いて本当に良かったと思いました。

また、衣類保管倉庫の視察では、男性用衣類と冬物衣類が不足している事を教えて頂いたので、今後の単組での活動に繋げていこうと思います。私事ではありますがラオスの保管倉庫で万代ユニオンが送った中古衣類の段ボールを2個見つけた事に感動し写真を撮ってすぐに単組の仲間に送りました。

もう一つ印象的だったのは、サンティパープ高校生寮の寮生や卒寮生との交流です。家庭環境や貧困のために学ぶことを諦めるしない子ども達が、この寮があることで学ぶ機会を与えてもらっていることを自覚し、夢・目標に向かって勉強している事を聞き感動しました。実際に卒寮生の中には大学の医学部に進学した子や外務省など各省庁に勤めている子がたくさん居ることに驚かされましたし、寮生の夢・目標を質問した時にも、ハッキリとした夢・目標を持って勉強している事に驚きました。また、サンティパープ高校生寮でも歓迎して頂き、歌や踊りを披露してくれた後に行われたバーシーセレモニーで、寮生達が我々メンバー全員にスーフアンを次々に巻いてくれている時は本当に感動的でした。



タイ衣類引き渡し式で

全体を通じては、CSAが行ってきたこれまでの支援を、ラオス・タイの人たちは心から感謝している事や、これからも継続して支援が必要という事を実感した5泊8日でした。しかしながら問題・課題も多くあることを痛感したことも事実です。特に、市内と遠隔地の格差は深刻であり、道路整備を含めたインフラの整備などCSAの支援だけでは解決できない問題だと感じました。

最後に、今回のワーキング・スタディー・ツアーに参加させて頂き、これまでCSAが行ってきた各種支援活動が素晴らしいものであるかを実感することが出来ました。私も今回参加させて頂いたメンバーの一員として、これからは多くの仲間にラオス・タイの実態や支援の必要性を伝えていこうと思っています。CSAの皆さんには、問題や課題がまだまだ山積みだと思いますが、今後もこのような活動を続けて頂けることを願っています。本当にありがとうございました。

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

JAM 電算印刷労働組合 井上 さとみ

まず始めに、今回ワーキング・スタディ・ツアーで多くの貴重な経験ができましたこと、CSAの事務局の皆様、このような機会を与えて下さったJAMの皆様に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

行くまでのラオスという国は、名前を聞いたことがある程度の遠い国でした。行ってみれば、内陸の国で、標高の高い地域では日中と夜の寒暖差が激しく、山に囲まれた風景等、地元・長野県に重なるところもあり、5日も過ごすうちに身近に感じられるようになりました。ガイドのフンペンさんの優しい人柄も、そのような環境に影響したように思います。

しかし、ラオスの特に地方では、日本の地方とは比べ物にならない、非常に多くの支援を必要とする状況が見えました。

JAMの行っている中古衣類の回収運動が、実際にどのように現地で受け取られているのかを知ることができたことは、今回のツアーでの最も大きな収穫のひとつです。ラオス保健省衣類倉庫では、届いていた物資はかなりの量に見えましたが、担当者の方から「これだけの量で、1年間もたない」という言葉があり、輸送費の問題など、一筋縄ではいかない課題があることも分かりました。

タイ社会開発福祉省の衣類倉庫でも、届いた物資を確認し、仕分け作業の様子なども見せていただきました。こちらでは「女性物の衣類が非常に多いが、男性物の衣類やズボン、ブランケットが不足している」という要望を受けました。

他の産別や、JAMの中でもすでに中古衣類の回収活動を盛んに行っている労働組合は多くありますが、我々のような規模の小さい単組では特に、継続可能な取り組み方を考える必要があります。ボランティア活動の根底にある「たすけあいの精神」は、労働組合の理念に通じます。基本に立ち返るという意味でも、単組の規模に関係なく、中古衣類の回収運動を行うことに意義があると思います。ただし継続して支援することが非常に大切です。

CSAや、CSAを支援する団体の支援によって建てられた小学校を訪問した時にも、経年劣化に対する修繕が課題として見え、継続支援の重要性を感じました。このツアーによって、支援の意義を再確認し、活動をただの作業にしないように働きかけることも、参加者に求められる役割のひとつではないかと思います。まずは、今回のツアーで見たり聞いたり感じたりしたことを多くの人に伝え、この活動を知らない人たちにも知ってもらえることができればと思います。

また、サンティパーブ高校生寮の卒業生との交流は特に印象的でした。ラオスの未来を背負う彼、彼女たちの未来が明るく、幸せなものになることを心から祈っています。

最後に、多くの時間を一緒に過ごさせていただいたCSAの山岡事務局長、鈴木事務局次長、石田団長、椎野副団長を始め、参加メンバーの皆様にも大変お世話になりました。

今回の経験を無駄にせず、これからの活動に活かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。



ホアナ村小学校で

# 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 三菱重工グループ労働組合連合会 森本 哲平



ホアナ村小学校で

今回のWSTへ参加させていただいて、大変貴重な体験をさせていただきましたことを、関係者の皆さまならびに現地で受け入れ等をして下さった方々に心より感謝申し上げます。

これまで個人として認識していたCSAの活動は「救援衣類を送る運動」のみでしたが、WSTに参加させていただいたことにより、「学校建設の支援」や「遠隔地の高校生支援」といった幅広い活動が行われていることを知り、また同時に、その活動に対して心から感謝してくれている現地の方々がいるということを知ることができました。

今回のWSTのなかで、特に印象深かった3点について、以下に纏めます。

まず1点目は、ラオスの地方の小学校を訪問したことです。計3つの小学校を訪問しましたが、生徒数に対して校舎の大きさが足りておらず、竹で作られた簡易的な教室もありました。また教室内は自然光であり、日本のように明るく灯されている状況ではありません。しかしながらそのような環境下でも、子どもたちは勉強に励んでおり、仲間との交流を通じて集団生活を学び、運動する場としても小学校が重要な役割を果たしていることが分かり、CSAの小学校建設が、現地の子どもたちにとって、ひいては社会にとって大きな役割を果たしていることを実感することができました。

2点目は、サンティパーブ高校生寮の視察、卒業生との懇親会です。生徒たちの話を聞くと、「ラオスの医学を発展させたい」「外務省で働きたい」「ラオスの発展のために地方で教師になりたい」といった発言があり、とりわけ「寮が無ければ高校に通うことが出来ず、狭い世界しか知ることが出来なかった。CSAがサンティパーブ高校に寮を建設してくれたおかげで様々なことを勉強することができCSAに感謝している」との発言を受け、CSAの活動が多くの方々の希望に繋がっているものと理解でき、また感銘を受けました。地方では、家から学校が遠い生徒は学校の近くに小屋をつくり、授業のある月～金までは小屋で寝泊まりして勉強し週末に家に帰るといった状況も少なくなく、寮の建設により現地の方々の役に立ち、夢や希望を与えていることを感じることが出来ました。

3点目は、救援衣類の倉庫視察です。ラオス保健省、タイ社会開発福祉省、それぞれの国の省の管理にて衣類を倉庫保管していますが、どちらの倉庫でも、現地担当よりCSAに対する感謝の言葉をいただきましたが、一方で、まだまだ衣類が足りないという実情を説明いただきましたので、今後の救援衣類を送る活動に繋がりたいです。

最後になりますが、今回のWSTを通じて、CSAのボランティア活動が現地でどれだけ助けになっているか、どれだけ多くの笑顔を生み出しているかを体感できました。今回の経験をより多くの仲間へ伝え理解を得て、より強力な活動が継続できるよう尽力したいと思います。

# 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 II労働組合連合会相馬支部 栗村 武志

今回のツアーへ参加させて頂く機会を頂いたことに対し、まずは組合員の皆様と基幹労連の皆様、また、企画運営含めご対応をいただきましたCSA事務局の皆様へ心より感謝申し上げます。

私はこれまで支援活動としてカンパ金への協力、救援衣類を送る活動を我々の組合で展開をしてまいりました。自身これまで一方的に衣類の送付・カンパ金の送金をしてきただけであり、この支援がどのように実際の支援に繋がっているのかについては連合や基幹労連発行のニュースなどから知るのみで、どのような場所/環境下にある地域に学校が建設されているのか、衣類がどのような方々の手元に届いているのか、その結果、支援をしたことで実際に本当に喜ばれているのかを理解していませんでした。

また、衣類を送る活動の中でも送料に関しても支援しておりますが、実態はどのような状況なのかということもニュース等の誌面からでは解りませんでした。

この度、現地学校へ訪れ、学校で待っていた子供たちの「どのように遊んでくれるの？」という期待に満たされたキラキラした目を見たとき、期待と感謝の思いを感じとることができました。今回のツアーにて訪問させていただきましたホアナ村小学校での校長先生はじめ、学校関係者の皆様から訪問したことに対してコメント含めてとても感謝いただき、出迎えられたことに非常に感動し、大きくその「思い」を感じ、受け取ることができました。しかし、海に面していない国の難しさも知ることができました。

他にこの度のツアーで気づいた点があります。

まず一点目は、小学校へ訪問した際に気がついたのですが、靴がボロボロな子が大半であったことです。中には裸足のままの子も数人見かけました。靴の支援は現在対象外になっておりますが、是非とも靴の支援に関しても検討いただきたく思いました。

二点目に、救援衣類の活動の中で男性もの、さらには冬物が必要であることも衣類倉庫を訪問した際に知ることができました。タイ・ラオスと聞くと、「暑いところ」というイメージが強く、半そでばかりが必要とされているのだと思っておりましたが、実は貧しい地域というのは山岳部に多く、冬用の衣類が必要なのだというのでした。今後は男性物/冬物を集中的に集められるように展開していこうと思います。

三点目に、高校生寮へ訪問した際に私からの質問で「製造業には興味があるか？」の問いに対してどなたからも回答が得られなかったことに対し、まずは今のラオスの現状、環境を把握する大きな反応であったと思っております。将来なりたい職業を聞いても大学へ行って医学を学びたい、物理を学びたいや、外務省に入りたい、地方の学校の先生になりたいという自国に貢献したい夢は語ってくれましたが、「何かを造ってみたい」という子が一人もいなかったということに対し、製造業で働いている立場からすると寂しい思いがありました。いつか、日本のトヨタや日産



タイ衣類引渡式で

の車、ホンダやヤマハ、スズキのバイクのようなもの、それ以上のものを造ってみたいという夢を語ってくれる子が出てくれることを期待したいと思います。

最後になりますが、この度のツアーを通じてC S A活動の必要性、大切さを直接知ることができたことは私の人生の上でも宝物になりました。今後さらにこの活動が発展し、活発になるように自身協力し続けていきたいと思ひます。

この度は誠に貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 住友重機械労連横須賀地方本部 仲 政 幸



ホアナ村小学校で

今回のツアーに参加させて頂きご対応頂きました関係者の皆様、本機会を下さった基幹労連をはじめとする組合員の皆様に心より感謝申し上げます。又、ツアーに参加された団長、副団長はじめ、メンバーの皆様、本当にお疲れ様でした。

振り返ると、私が、始めの挨拶で述べました「団結」、さすが皆さん産別は違っても労働組合の役者勢揃いだけあって力合わせ、心合わせができ、皆が団結し仕事をやり終えたのではないかと思います。

皆さんの事を思い浮かべながら「にやにや」しながらこの感想文を書いています。ツアーが終わり羽田で解散してからもう1週間が経過します。今は、現実に戻り日々の仕事を熟しています。

お恥ずかしい限りですが、今までは、単に募金活動の一環として取り組んでいました。今回ツアーに参加すると言う事で、事前に資料等でC S Aに関する内容を確認はしたつもり（一夜漬けですが・・・）でしたが、直接現地へ赴き、目で見、肌で感じ、現地の人達と交流した事で、C S Aの活動の意味を痛感させられました。

C S Aの3本柱である、①救援衣類送付、②学校建設・補修、③遠隔地の高校生支援の中で、救援衣類に関してはラオスでは保健省、タイでは社会開発福祉省がそれぞれ管轄し、管理されており、職員が仕分け作業を行い、貧困地帯へと送付されていく。今回、タイの小学校訪問はスケジュールに無かったので状況は確認出来ませんでした。ラオスの小学校では明らかに日本から送付された衣類を着ている子供たちがほとんどのように見受けられました。

今回、3校の小学校に訪問し衣類の提供、補修状況の確認、子供たちとの交流をしましたが、子供たちは活気にあふれ、窮屈な机で紙飛行機を作ったり、外へ出て綱引きをしたり何事にも興味津々で一生懸命取り組んでいた様子は生涯決して忘れることはないだろうと思ひます。C S Aはラオスに24校の小学校を建設しましたが、まだまだ学校は足りないそうです。

そういった中、CSAでは遠隔地の高校生支援も積極的に行っています。首都のビエンチャンから第二の都市、ルアンプラバンにあるサンティパーブ高校生寮の視察訪問をしました。生徒たちによる歌の披露、民族舞踊、又、ラオスでの最も重要な儀式とされる「バーシーの儀式」、生徒、先生、村人達の誠心誠意、心のこもった熱烈歓迎には驚きました。

前日に卒寮生達との交流をしましたので、卒寮生は、日本への留学、又、ラオス国立大学へ進学し、あらゆる学部を卒業しラオスの為に一生懸命に働いて活躍している事を在寮生との交流の場で報告すると、皆も将来の熱い夢を楽しそうに語ってくれました。優秀な生徒にもかかわらず、いろんな事情で高校に進学できない生徒たちがラオスには大勢いるそうです。あらためてCSAの活動に共感し、この支援活動は本当に素晴らしい事だと実感しました。若い将来のある学生たちの為にも引き続き、労働組合としてバックアップしていきたいと思います。

経済・社会インフラの整備や教育関係整備等、まだまだ発展途上のラオスが早く自立してくれればと願います。今回確認された様々な問題点、また、児童、生徒、卒寮生の1年後の姿やタイ、ラオスの職員との意見交換は、次回も同じメンバーで参加し、最低2回は確認したいと思いましたので、是非今後の検討課題としてあげておきたいと思います。

山岡事務局長、鈴木事務局次長を始め共に1週間を過ごしたメンバーの皆さん、お世話になりました。素晴らしい仲間巡りに巡り合えた事に感謝致します。

最後に「CSAの活動が無いと子供たちの未来は無い！」こう言った話を前広に組合員へ報告して行く事で更なる募金活動、衣類提供、支援等のバックアップを通じ未来ある子供たちの為に活動していこうと思います。

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 JFEスチール知多労働組合 西山 英二

2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加させて頂き、まずはご対応頂いたCSAの山岡事務局長、鈴木事務局次長、さらに機会を下さった基幹労連の皆さま、そして受け入れをいただいた現地の皆さまに心から感謝を申し上げます。

本ツアーに参加させていただいた私の感想は、これまではラオスという国を全く知らなかったがラオスのことを勉強していくうちに、着実にラオスのことが好きになっていきました。CSAの活動を通じて、もっとラオスの人達の為に支援していきたいと思いました。8日間のツアーのなかで、特に印象に残った3点について以下にまとめてみます。

まず、1点目は現地の小学校を訪問したことです。小学校は3校訪問しましたが、最初に訪問したファサン村小学校(24番目校)では基幹



ナカン村小学校で

労連が2014年に寄贈しており、同じ基幹労連の活動を実際に目で見ることができ貴重な経験をさせて頂きました。また、翌年に寄贈した井戸がどのように活躍しているかも視察することができました。また、問題点として民族によって言語が異なり先生と生徒に「言葉の壁」が存在するといったことにも驚きました。言葉の壁をなくす為にもプレスクール（幼稚園）に入りラオス語に慣れなければいけないのですが、プレスクール（幼稚園）が不足しているといった課題も知ることができました。

2点目は、AAR Japan [難民を助ける会] の訪問です。AAR Japanの活動を聞いて様々な支援の仕方があると思いました。ナマズ、カエルの養殖といった小規模企業支援では障がい者でも自分達で仕事ができ、生きがいに繋がる大きな支援だと感じました。ラオスは現在も、ベトナム戦争時におけるアメリカ軍の空爆投下による不発弾で多くの方々が被害に遭っており、継続した国際社会の支援やAARのようなNGOの支援活動の必要性を感じました。

3点目はラオスの教育事情です。これまでCSAを初めとした団体が支援を継続しているものの、まだまだ勉強をしたくても勉強することができない環境にあると思いました。また、地域により教育レベルが異なるといった課題もあげられていました。サンティパーブ高校では優秀な生徒がたくさんいますが、進学・留学の門がとても狭いようでした。目を輝かせて将来の夢を語るサンティパーブ高校の寮生を見ていて夢を叶えてあげたいと心から思いました。

最後に、CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加できて、これまでのCSAの各種活動が素晴らしいものであることを実感することができました。また、一緒に参加した仲間と通訳のフンペンさんとの出会いは、かけがえのないものとなりました。今後はワーキング・スタディ・ツアーで経験したことを、より多くの組合員に伝えて行きたいと思います。



移動車内にて

## 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

JEC連合 セントラル硝子労働組合松阪支部 田所伸吾

今回のツアーでは貴重な経験をさせて頂くことが出来、CSAの皆様へ感謝を申し上げます。

我々セントラル硝子労働組合はこれまでにCSAの協力を得て、2000年にホアナ村、2006年にナコン村に小学校を寄贈しております。そして昨年の5月、古くなったホアナ村小学校を補修するため、単組にて視察団を結成してラオスを訪問しており、私自身、今回が2回目の訪問となりました。個人的には、今回の訪問でホアナ村小学校の補修工事の完成を確認することがメインでありましたが、違う小学校も視察出来ることや、他労組の方々と情報交換が出来ることも非常に楽しみにしておりました。

到着翌日に早速小学校の訪問となり、まずは基幹労連が設立した24番目校であるファサン村小学校の訪問。2014年に完成した校舎のため非常にきれいな印象であり、さらに鉄骨構造であるとのことで、時代は進んでいるんだなと感心してしまいました。また、昨年井戸のポンプを寄贈したとのことで、安定した水の確保が進んでいることも見受けられました。我々が寄贈した小学校にもポンプがあれば喜ぶだろうと思い、今後の申し送りに入れておきたいと思っています。



ホアナ村小学校の校長と

次にナカン村小学校を訪問。この学校は我々が寄贈したホアナ村小学校より古い5番目校で1998年に完成しており、さすがに建物の老朽も感じましたが、先生方が一生懸命学校を守っている姿を嬉しくも思いました。この小学校の全景を見て今さらながら「ラオスの小学校は同じ間取りで作られているんだ」と納得してしまいました。

ビエンチャンでの全ての訪問が完了し、いよいよ飛行機でルアンプラバンに移動。そのままホアナ村小学校へ移動となりましたが、行きの道路沿いの家々は半年前と何も変わらず、道端で生活している人々の吐息が聞こえてくるような懐かしい風景をみていると、これからのラオスの発展を強く願うことと同時に、人間として最低限の生活をしている人々に、ある意味尊敬に近い思いを抱くこととなりました。

予定通り16時にホアナ村小学校に到着し、懐かしい先生方と再会することが出来たのですが、校長先生がご懐妊とのことで、大きなおなかをしていたのは、今回のラオス訪問の中で最大の驚きだったかもしれません。訪問の挨拶が終わり次第、小学校の補修状況を確認。元気に走り回る子供たちを横目に、また交流をさせていただいている他のメンバーに申し訳ないと思いながら、隅々まで確認をさせていただきました。確認の結果、補修をお願いしていた壁や天井や扉は綺麗に直されておりましたが、屋根については我々が思い描いていたものとは違った補修結果になっており残念な結果となりました。ただ、校長先生も生徒たちも村の人たちも小学校が綺麗に生まれ変わったことをとても喜んでいる様子が伺えましたので、今回の補修は成功だったと判断しております。

また今回のツアーでは小学校の他、教育省等の省庁を訪問致しましたが、先々で「まだまだ教育の環境が整っていないのが現状」であることをお聞きしました。そういったなか、小学校建設はラオスの発展にも繋がる重要な取り組みであると認識しておりますが、日本の労働界ではまだまだラオスの認識も低く、支援の輪が広がっていないのが実情です。単組として小学校を2校建設している我々セントラル硝子労働組合が、旗振り役として、もっと周囲に情報を発信していくことが重要なんだと改めて認識することとなりました。

帰国の途に就き、私自身この先ホアナ村小学校を訪れることはもう無いだろうと思うと少し寂しい思いでしたが、次の世代に申し送るための材料として、しっかりと自分の目で確かめられたことは、非常に価値があったと感じております。

今回の訪問でお世話になったメンバーの皆様、同行してくださったCSAの山岡さん、鈴木さんとは、色々な情報交換が出来、とても勉強になりました。かけがえのない時間を共有できたことは、私の財産となりました。ありがとうございました。またどこかでお会いしましょう！

# 2018年ワーキング・スタディ・ツアーに参加して

基幹労連 本部 椎野 幸作

今回のツアーに参加させていただき、おそらくもう二度とラオスに足を踏み入れる機会はないだろうと思うと、とても素晴らしい経験をさせていただいたと、深く感謝する次第です。

ラオスの印象は、都市部での生活は特に不自由を感じませんでした。田舎は薪で炊事しなければならない等、ひどく遅れていると感じました。私が育った鹿児島の田舎でもそこまではなかった。日本に置き換えると50年以上昔に相当するのではないかと思ひめぐらしたところ。特に印象深かったのは、旅程2日目のファサン村小学校訪問の時の移動です。

ビエンチャンを出発してメコン川沿いに約2時間、車線もガードレールも歩道もない2.5車線ほどの幅の道を、相当な速度で走って下さいまして、時折、前を走る車に追いつくと、行けると判断したら、対向車が来ようが来まいが躊躇なしにアクセルを踏まれ、最強のスリルを堪能させていただきました。その後、川沿いの道から分かれ、山道に入るとダートに変わり、スピードは幾分落としていただいたものの、ひどい縦揺れと横揺れに1時間半。すさまじく印象に残る旅程でした。

小学校は、全部で3校訪問させていただきましたが、あらかじめ送ってあった衣類の引き渡し式や子供たちとの交流などが行われ、すべての学校で、先生、子供たち、近隣の村人たちの猛烈な感謝の思いが、言葉はわからないけど、十分に伝わってきて、ひどく感動しました。CSAの活動のすばらしさを実感したところです。

やはり現地に赴いて、実際に目で見て、触れて、交流してみても、報告書を読んだだけ、テレビの映像を見ただけでは、わからない、感じられないことを、非常に多く学ぶことができた素晴らしいツアーだったと思います。



ファサン村小学校で

一方、タイでは、バンコクは想像以上に発展しているし、救援衣類の引き渡しが行われた社会開発福祉省の建物が立派すぎて、(お金を使うところが) 違うだろー！のフレーズが頭の中に響き渡りました。日程的に難しいですが、タイでも、支援を必要とする人のもとに視察に行けていたら、違った感想になったと思います。

アンケートにも記入しましたが、政府関係機関の訪問は、報告書や参考文献を読んだ方がより正確に把握できると思いますので、できれば現地視察を重点的に組み込んでいただけたらと思います。

最後に、今回のツアーで知り合った仲間たちと末永く交流していければと思います。本当にありがとうございました。

ご安全に！

# 編 集 後 記

アジア連帯委員会（CSA）鈴木 隆

アジア連帯委員会の事務局に着任したのが昨年の11月6日、新任地での最初の重要任務として2018年ワーキング・スタディ・ツアー（WST）事務局を担当させて頂いた。多くの貴重な体験と新たな発見、そして何よりも団員の皆様や現地でのすばらしい方々との出会いの機会を得ることができ、アジア連帯委員会を支援して下さっている連合、支援産別、その構成組合と組合員・支援者のみなさんに衷心より感謝申し上げます。今回のWSTに参加し学んだ事と、また本報告書を編集する中で感じた率直な感想を述べ編集後記とします。



タートルアン寺院の前で

## 1. 「継続は力なり」を痛感

アジア連帯委員会は、その前進である「インドシナ難民共済委員会」が1981年に設立され、その後も不断の組織改革を行い、1996年アジア諸国との連帯を目指して「アジア連帯委員会」と名称を変え、アジアの開発途上国の人々と連携して、共生・共栄を目指す運動を進め、現在に至っています。この運動を積み上げてきた先輩諸氏に対し、改めて深甚の敬意とともに、運動の継続の大切さ「継続は力なり」を痛感しました。CSAからの支援に対する感謝の声の数々が、支援している方々に大きな励みと力の源泉になっていると思います。

## 2. 組織も個人も社会貢献・国際貢献への関与の必要性を実感

昨年、一昨年と世界的な動きとして我が国・自組織再優先的な考え（～ファースト）が、日本を含め世界中を席捲し現在もその潮流は続いているように思います。果たしてそれで良いのかな（？）と思っているのは私だけではではないと思います。国家もあるいは企業も「御身大切」は一定の理解は得られるものの、成熟した組織であれば社会貢献・世界貢献は、その組織の責任でもあると思います。今回の訪問先で共通して思うのは、組織も個人もこんな時代だからこそ、支援を求めている方々への救援活動を、労働組合であれば労働運動の今日的な活動として、また個人であれば社会貢献のすそ野を広げるべく「共感の醸成」＝「情報発信」を着実に実践せねばと思いました。

## 3. 副産物に感謝

今回のWSTを通じて、参加頂いたメンバーの皆さんには本当に絶大なご協力を頂きました。ある時はこちらの無茶ぶりにも関わらず、キーワードは「臨機応変」等と説得力の無い言い分にも快く（？）受け入れて頂きました。過酷な悪路の移動や強行軍にも関わらず、訪問先では団員が一枚岩となって各自の役割分担をキッチリと対応して頂きました。その事により諸行事を滞りなく成功裏に終えることができたと思います。現地でのミッションの成功と今回の海外出張を通して、私にとって新たな仲間・友人ができた事は、この上もない喜びです。

重ねて全団員に心から厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

# 編 集 後 記

アジア連帯委員会（C S A）山岡みゆき



ファサン村で

ワーキング・スタディ・ツアーは、毎年支援団体の代表に現地での事業を実際に見て、評価して頂き、出されたご意見を今後の活動に活かしていくために実施しています。

2018年ワーキング・スタディ・ツアーも石田団長、椎野副団長を中心に、メンバーは役割を果たしながら、ラオス、タイで、C S A事業を視察するとともに現地での交流や学習を通して、それぞれ大きな成果を得て、無事に帰国することができました。

今年もビエンチャンでラオス国立大学に進学している卒寮生や、ラオス省庁で働いている寮の卒寮生との交流の場を持ち、メンバーは片言ながら卒寮生と交流しました。彼らは、卒寮年度ごとの自己紹介を行い、口ぐちに「寮に入り勉強する機会を持てたので、いい仕事にも就けると思う。今の自分があるのは、C S Aのお蔭です」と感謝を述べていました。これらの言葉を聞き、ラオスのこれからの国を担う若者の育成支援の役割を果たしてきたC S A活動の成果を実感することができました。

今年のツアーは事務局長として最後のツアーになるため、鈴木事務局次長と二人三脚の事務局でしたので、この5年間を振り返り感慨深いツアーとなりました。今年のツアーは、①メンバーの現地での移動車が2台になったこと、②急遽ラオス赤十字社から訪問要請を受け、会長からC S Aの衣類が被災者に大変役立っているとして感謝の品をいただいたこと、③例年より多い3つの小学校を訪問し、補修等の確認を行ったことなど異例づくめでした。

事務局の行き届かない部分も多々あったと思いますが、メンバーの臨機応変な対応や協力により、当初の目的を果たすことができました。本当にメンバーのご協力に感謝申し上げます。

最後に、ご多忙の中、チームを送り出して下さった組織の皆様にご感謝申し上げます。また、全ての関係者の皆様にご感謝します。

コップチャイライライ！



第1期卒寮生のヌーソン君と



カネボウ労組からの衣類を高林さんが寮生に



寮生による民族舞踊披露



ナカン村小学校教室内で



卒寮生と井上さん・女子会？

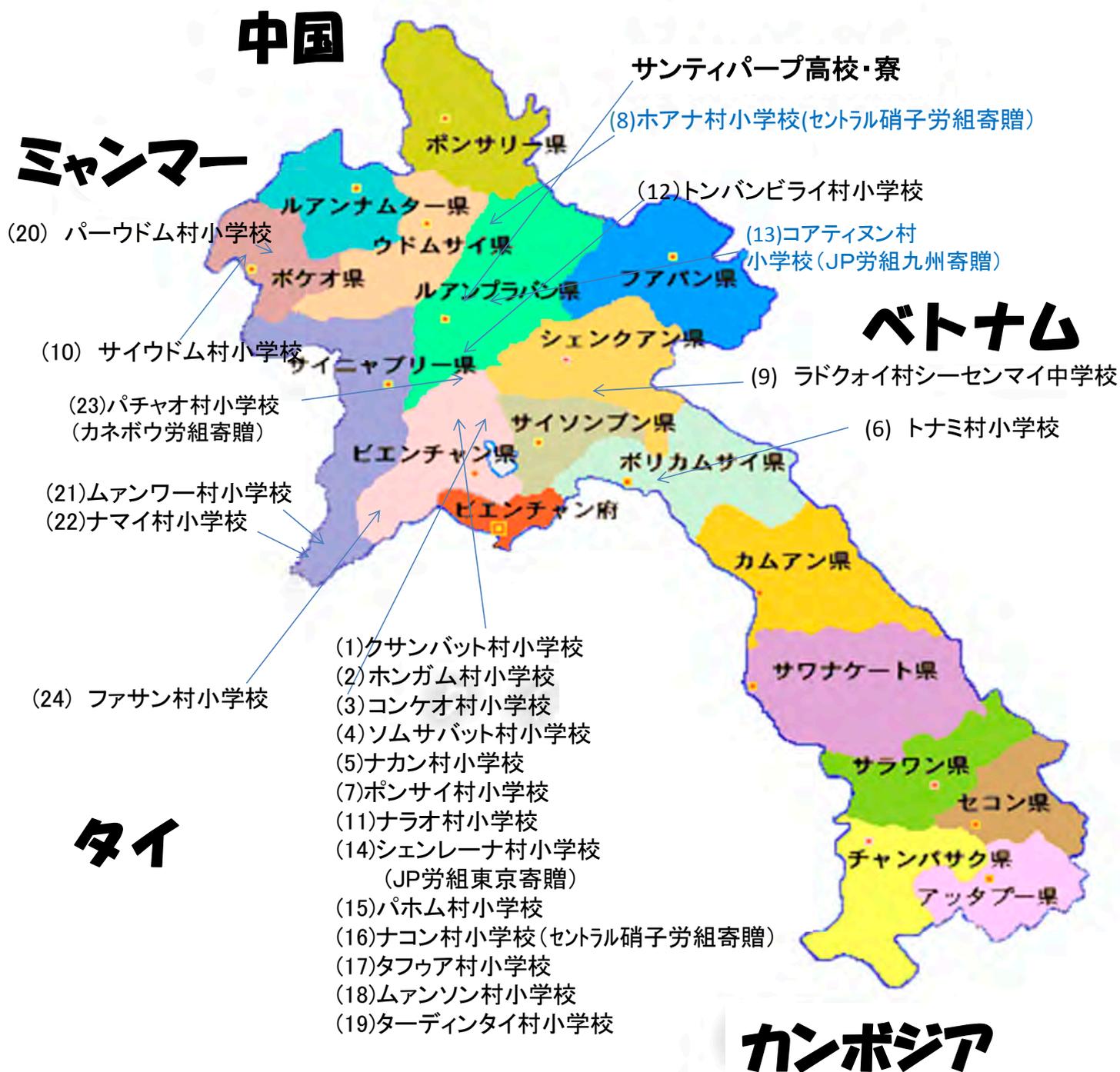


ナカン村小学校で綱引き



公式訪問前夜のビエンチャン市内  
ナイトマーケット視察

# ラオスにおけるアジア連帯委員会(CSA) 教育事業 — 小学校建設地



2018年3月現在

## CSA活動へのご支援・ご協力をお願い

下記のような方法がございます。

### 1. 会員登録によるご支援

団体会員：年会費一口10,000円から（団体、企業等）

個人会員：年会費3,000円（個人）

### 2. 救援衣類を送るご支援

毎年、10月初旬にタイ、ラオスの恵まれない人や被災者に送るための中古衣類を集めています。  
衣類の海外輸送費にあてる輸送募金もお願いしています。

### 3. 寄付によるご支援

#### (1) 救援衣類を送る運動「輸送募金」：1,000円から

衣類提供者は1箱1,000円が目安です。輸送募金のみのご協力もお願いしています。

#### (2) ラオスで学校建設・補修をする「学校建設・補修募金」：1,000円から

#### (3) ラオスの高校生を支援する「高校生支援募金」：1,000円から

### 4. 団体や企業による学校建設・補修等のスポンサー

ラオスで学校建設・補修、教科書や文房具などの支援。

#### <会費／募金の振込先>

①郵便局

口座記号番号 00140-7-545101

アジア連帯委員会

②銀行振込口座

中央労働金庫 田町支店 普通1988431

アジア連帯委員会

## 2018年 CSAワーキング・スタディ・ツアー報告書

発行日 2018年3月

発行者 アジア連帯委員会 (CSA)

〒105-0014 東京都港区芝 2-20-12 友愛会館 14階

Tel (03) 3769-4177 Fax (03) 3769-4178

メール：info@ngo-csa.jp

<http://www.ngo-csa.jp/>

印刷 株式会社コンポーズ・ユニ

Tel (03) 3456-1541 Fax (03) 3798-3303

